

4 章 一緒に食べる

／レストランで見つけた大テーブルのアフォーダンス

4-1 街の中の大テーブル

4-2 大テーブルのプラン

4-3 個体間距離プロキシミクス



「らっしゃい」
(映画「ブレードランナーから」)

前章の続き、ケース 6 に当たる。たまたま同席した客が、身分の分け隔てなく共に飲んで食べて、談笑する昭和の居酒屋。いい雰囲気だったなーと数少ない経験からも思う。イギリスのパブでは、ジェントと労働者では入口を違えるが、中では一緒という。

新宿歌舞伎町、高層ビル街の裏路地で、オリンピック景気に沸いたころの「ガラガラ、らっしゃい」が、今も聞けるという。復活のきっかけが写真の一コマ、1982 公開の米 SF 映画「ブレードランナー」の一シーンである。想定は環境汚染で廃墟と化した 30 年後の大都市というから、今日の新宿歌舞伎町であってもかまわないわけである。ネットで拡散した情報をもとに欧米の観光客（バックパッカー）が殺到し、ハリソンフォード（左の人物）が演じるブレードランナー*1が味わった東の間の愉楽を追体験しているという。だから現在の居酒屋（Yakitori）には、国籍の隔てもない。

「都市のインテリア」を＜内部空間の外部化＞と定義したが、＜外部空間の内部化＞は以前からある。居酒屋は建物の中の路地、食事という日常的なコストの中で、一緒に座れる都市空間が実現している。アルコール抜きでそれが可能だろうか。

* 1 : ブレードランナー

近未来の地球では、環境汚染に強い複製人間レプリカントが人に代わって肉体労働をしている。レプリカントは人に逆らわないようにプログラミングされているが、世代交代を重ねるうちに自意識に目覚めるレプリカントも出てくる。それを抹殺するガンマンがブレードランナーである。

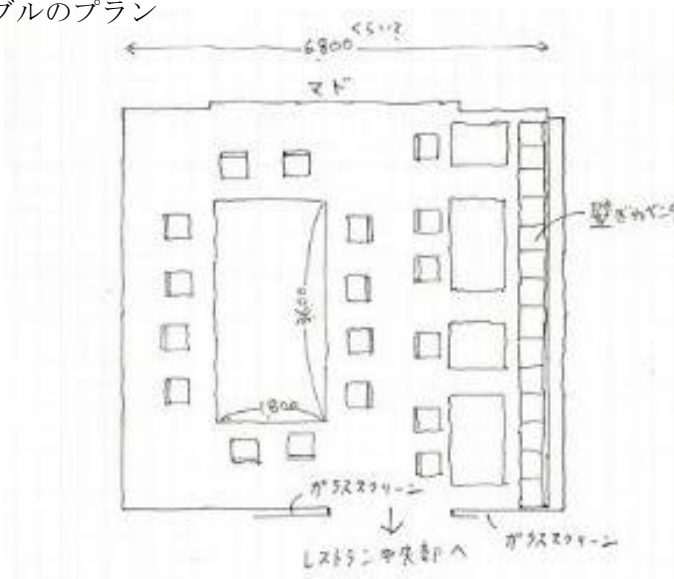
4-1 街の中の大テーブル



前章「一緒に座る」のテーマを議論していた折に、たまたま入ったレストランOT屋で、一人客のためにしつらえられた大テーブルを見つけた。レストランでは、一人客のために普通はカウンター席が設けられている。狭苦しくて無味乾燥で、食事というよりは食餌に近い。<居る>ところではないから客の回転は速い。筆者がよく行くうどんのチェーン店では、カウンター席だけでなく、中の島の席においても、わざわざ視線を遮る目隠しが設けられていた。目隠しは図書館にもみられる設備であるが、業界では<落ち着いた雰囲気>を醸成するための定番設備なのだろうか。

しかしOT屋の大テーブルは、中央部には調味料とミドリが配され、(ダウンライトとはゆかなくとも)天井の下向きライトが卓上を照らして、ホテルの会食みたいにしゃべっている。酒が入らないので声高な談笑風景は見られないが、事情が納得できるので相席の気まずさもない。私たちは角に陣取って、小さな声で話した。

4-2 大テーブルのプラン



二人席、4人席が並ぶ一角に、12人掛けの大テーブルが置かれている。余裕をもって置かれているのでむしろ贅沢設備に見えたが、図にしてみるとやはり、一人客に4人席を専有されるよりは収容効率が高い。OT屋が大テーブルを導入した理由が二人席4人席に生ずる空席にあることは、レストランの経営者でなくても分かる。4人席は基本的に家族、仲間との共食用であり、これに相席を申し込むには勇気がいる。では二人掛けに一人で座っている席は個食に違いないのだから相席はフリーパスカーという、年齢性別等組み合わせによってはなお難しいことになる。前章「一緒に座る」において、

何か共有する関心や行動があれば一緒に座りやすいと述べたように、食事を共にするのであるから相席は容易であるが、個食用の席があればなおよいということであろうか。後は、たまたま隣席した人とよい関係が築けるかどうかであろう。

私たちはこの大テーブルに感銘を受け、「都市のインテリア」の課題解決に役立つ「何か」が隠されていると感じたのであるが、それは何か。

4-3 個体間距離プロキシミクス

<隠された何か>については、アメリカの文化人類学者E. T. ホールが「隠れた次元 Hidden Dimension」を著して、周到な議論を展開している。

本書の骨子は、動物の個体間距離を人の行動に敷衍するものである。ホールは動物と人間との観察にもとづいて、人間がもつ対人間距離を次のように要約した。

密接距離 (intimate distance)

15～45cm。愛撫、格闘、慰め、保護の意識をもつ距離。

個人的距離 (personal space)

45cm～1.2m。相手の気持ちを察しながら、個人的関心や関係を話し合うことができる距離。

社会的距離 (social distance)

1.2～3.6m。秘書や応接係が客と応対する距離、あるいは、人前でも自分の仕事に集中できる距離。

公衆距離 (public distance)

3.6m以上。公演会の場合など、公衆との間にとる距離。

各距離はさらに近接層と遠隔層とにわけられ、あわせて8通りの分類がなされている。具体的な距離範囲は民族や動物の種類などによってことなるが、距離が4通りまたは8通りに分類できることは共通しているという

人と人との距離<人・間>こそ環境の最小単位であることを、ホールは気付かせてくれた。プロクセミクス Proxemics (対人距離学) は都市のインテリアの基本原理あるといえる。一緒に座る、一緒に食べる行為等は<個人的距離>での出来事であるが、人はときに<公衆距離>の出来事のように思いこもうとする。そこで無用のストレス、トラブルが起こるのではないか。

プロクセミクスは生物生態学を、より具体的に言えば動物のナワバリ行動を下敷き

にしているの、分かりやすい代わりに、単純すぎる<きわどき>も危惧される。文化人類学者であるホールは、単純明快な距離感メジャーを提示した後で、民族文化間での相違、あるいは文学表現にみられる人の個性による相違についても、多くのページを割いて慎重を期している。先ほどのメジャーはアメリカ東部の人を念頭に置いた結論とのものであり、日本人は欧米人からはよく<雑居に強い民族>と評される。冒頭で挙げた事例、新宿歌舞伎町の居酒屋を体験したバックパッカーは、夜は古びた旅館で雑魚寝体験もすると言う。お金の節約もあるが、日本文化を理解するためにはぜひとも必要な体験と理解されているらしい。

人と人との<ふれあい>をホールは involvement と呼び、研究の目的を確認するキーワードとして多用している。結果的にその意味は包括的であるので、訳者もあえて訳語を与えずそのままインボルブメントと表記し、読者の判読にゆだねている

OT屋の大テーブルで感じた<何か>は、言ってみれば<インボルブメント>ではなかったかと思われる。卓上の鉢植えとダウンライトが、インボルブメントの触媒の働きを果たしている。

後記

1. 本章のテーマは、パタンランゲージでは次のように取り上げられている。

PL_182 EATING ATOMOSPHERE/食卓の空気

人が共に食事をするときは、<心が一つになる何か>が要る—そうでなければさっさと出て行ってしまふ・・・、客がリピーターになるかどうかと分かれ目がここにある。この章でアレクザンダーが指摘する何かは「灯り（ダウンライト）」であり、別の章では「色彩」「バラバラの椅子」「作り付けの腰掛」などが取り上げられる。

2. <心がひとつになる何か>というよりはむしろトラブルを未然に防ぐ予防措置ではないかと思われるが、OT屋では食事をトレー（盆）に乗せて提供している。お盆は



個食と共食の境目を無くする〈伝統的関係調和装置〉ではなかつたらうか。

3. proxemics という見慣れない英語を筆者は最初に目にした時は、ラテン語を使った学術用語として納得していたのであるが、バルセロナオリンピックに先立って訪れたスペイン・バルセロナの地下鉄で、「次の駅は・・・」というところで「プロキシマ・エスタシオン・・・」と連呼するのを聴いた。スペイン語では proxima は next の意味だったことが分かって親しみを感じ、以後はこの語を忘れなくなった。